

農村生活改善による改良野良着の普及とモンペ

尾崎(井内)智子

はじめに

本稿は、生活改善運動が農村に与えた影響を、女性用の野良着改善を事例として明らかにする。第一に、生活改善同盟会からはじまる諸雑誌・諸団体の仕事着改良に関する取り組みを概括し、第二に、静岡県田方郡田中村(現伊豆の国市)を事例として、諸雑誌・団体の取り組みがこの地域の「野良着」にどのような影響を与えたのかを明らかにしていきたい。

生活改善運動は、衣食住や冠婚葬祭といった生活全般の合理化を目指す官製のキャンペーンで、第一次世界大戦中から第二次世界大戦後まで官民諸団体によって断続的に行われた。なかでも本稿では、一九二〇(大正九)年一月に発足した生活改善同盟会が最初に提唱した仕事着の改良が、一九三〇年代に入ってから農村に受容され定着したのかをとりあげる。生活改善同盟会は、一九二〇年に文部省の外

郭団体として組織され、『生活改善の葉』(二八年)や『農村生活改善指針』(三二年)を発表して、従来の生活の問題点を指摘し改善の指針を示した⁽¹⁾。先行研究によれば、生活改善同盟会が示した改善の方針はまず都市に住む新中間層へ受容され、次いで民力涵養運動⁽²⁾や農山漁村経済更生運動といった官製の運動を通じて農山漁村へと広がった。具体的には、生活改善同盟会が示した生活の合理化策が諸運動の中で決められた市町村・集落レベルの申合せ事項に取り入れられていったのである。

ただし、都市においても農村においても、生活改善運動の実践は生活改善同盟会の直接の影響下ではなく、同会以外の諸雑誌・諸団体が介在することで始めて可能になったと考えられる。たとえば農村へ影響を与えたのは、当時農村で最も普及していた雑誌『家の光』及び農山漁村経済更生運動の担い手として全国に設置された産業組合、『婦人之友』記事での啓発のみならず農村セトルメントを築いて生活の合理化を呼びかけた『婦人之友』友の会などであった。これらの生活改

善を目指す生活改善同盟会以外の団体は、同盟会が資金難から活動を停滞させるのとは対照的に、一九三〇年代に入って活動を活発化させた。そして、これらの団体は、都市や農村で実際に活動した経験を背景に、一九三七年以降の戦時統制期に、国家政策と社会に対して、より大きな影響を及ぼしていく。

二〇一〇年代に入って、生活改善運動への関心が高まり、歴史学及び民俗学の分野で研究が進んできた。まず、歴史学の研究では日本の戦前・戦後はもとより中国・韓国・台湾の分析が進み、国際比較も可能になってきている。ただし、これらの研究では運動を動かす理念や運動が必要だった背景は解明されつつあるが、生活改善運動が本来に実践されたのか。本当に個人の生活にまで入り込み、生活を変化させられたのかという点については、依然として検討の余地が残っている。本研究は村レベルの運動をとりあげ、個々人の生活の変化に踏み込む点とする点で、次にあげる民俗学の研究と問題意識を同じくしている。

田中宣一をはじめとする民俗学の生活改善運動研究は、日本の主に戦後の運動について、民俗調査や地域の史資料から実態を明らかにしようとする⁽⁵⁾。このような実態研究は積み重ねられていくべきだが、「官」側の企画・働きかけ⁽⁶⁾に対して「民」側の意思・工夫・実行⁽⁷⁾を重視するこれらの研究は、次の二点を視野に入れていない。それは第一に、地域の実践がメディアで報じられることで全国的な運動へと展開する過程、第二に全国的な運動が国家政策へ影響を与える可能性である。第二の点を視野に入れていないのはこれらの研究が戦後の生活改善運動を主な検討の対象としているためだろう。つまり、生活改善運動が集約され政策へ影響を与えたのは戦時統制期に限られており、この戦時統制期の運動を反省して、戦後に始まった生活改善運動は各

地の実践を集約することに消極的だった⁽⁷⁾。しかし、第一の点の閑却するのは、かえって「民」側の意思・工夫・実行⁽⁷⁾を過小評価することにつながっているのではないだろうか。たとえば、田中宣一『暮らしの革命』の「おわりに」でふれられている地産地消や六次産業化といった「民」の「ニーズ」によって生じた⁽⁸⁾動きも、実際には先駆的な事例がメディアで報道されることによって全国的に広まっている。地域での実践は全国に影響を与える可能性があり、この点で、戦後の運動も戦前の生活改善運動と変わりはないのである。本研究がとりあげる仕事着の改良は、生活改善同盟会という文部省の外郭団体から始まった運動だが、諸雑誌・諸団体を介して「民」側の創意工夫を取り込み、全国へ広まっていく。そして、戦時統制期には女性の国民服の問題へと影響を与えるまでになった。以下にこの過程を、雑誌・新聞記事、地域の史資料のほか、戦前・戦時中から行われてきた民俗調査を用いて明らかにする。

民俗学の分野では宮本勢助による「山袴」収集や瀬川清子による「着物」調査を始めとして、一九八〇年代まで全国的な規模の「仕事着」「労働着」調査が行われ、さらに都道府県単位の詳細調査が別個に行われてきた⁽¹⁰⁾。本稿ではこれらの調査を資料として用いるが、諸調査報告書で使われた「仕事着」「労働着」の名称ではなく、「野良着」という言葉を本文では使うこととする。「野良着」は田畑や山といった戸外労働で着る服の意味で、本稿では漁業・水産業に従事する際の服装は含まない。これは漁業・水産業では生活改善同盟会が提唱した「働きやすい」「能率的」な服装の形態が大きく異なり、また漁村・漁港には農山村とは別の文化伝達のルートがあると考えられるからである。

第一章 諸雑誌・諸団体による野良着改良の宣伝

第一節 昭和初期の野良着と『農村生活改善指針』

一九二四（大正一五）年に生活改善同盟会に設置された農村生活改善調査委員会は、三一年に調査を完了し『農村生活改善指針』を発表した。生活改善同盟会は二四年に『生活改善の葉』という全国向けの方針を出しているが、『生活改善の葉』では「農村にしつくり適合しない」という声があがったという。この声に応え、一九二四年度から新たに委員会を設けて、農村に則した指針を示したものが『農村生活改善指針』である。¹²⁾

史料1 『農村生活改善指針』より「衣服の改善」¹³⁾

- 一、衣服の構造及様式は衣服本来の職能を顧慮し、成る可く之を簡単にして製作に手数を要せず、且つ活動労作の自由を妨げざるものとしたい
- 二、備付衣服の種類及枚数を少くして被服費を節約したい
- 三、衣服地は木綿使用を奨励し従来の習慣に囚はる、事なく、衣服の種類と用途とによつて其の選択を適當にしたい
- 四、衣服地はなるべく無地、型付及び縞物を奨励したい
- 五、反物は広幅長尺のものを利用する様にしたい
- 六、衣服は常に洗濯手入れを行ひ、肌衣は特に注意して清潔なものを着る様にしたい
- 七、寝具には上敷を用ひるやうにしたい
- 八、男子の礼装は和服の場合には羽織（黒紋付）袴を用ひるのを

本体とする、併し事情によつては其の何れか一方を用ひても差支へない、尚凶事で略装の場合は喪章を附することにした

九、男子の労働服は次の何れかにしたい

イ、半纏、腹掛、股引

ロ、シャツ及び半ズボン

ハ、シャツ及びゴルフ式ズボン

ニ、詰衿洋服及び脚絆

ホ、労働の種類によつては上つ張り、冠り物等を用ひること

一〇、婦人の礼装は吉凶ともに無地紋附を本体とし模様あるも可い、喪服としての使用には喪章を附けることにしたい、事情によつては吉凶とも縞物を用ひてよろしい

一一、婦人平常服は袂を短くし帯幅を狭くし下ばきを用ひる様にしたい

一二、婦人の仕事着は次の様にしたい

活動の自由を妨げぬ為め仕事着は筒袖に改めたいと思ひます。そしてモンペ、カルサンの類を用ひることにしたいと思ひます。

一三、衣服調製の際は次の様な注意がしたい

イ、無用の衣類を多数作る代りに必要な品は出来るだけ実質のよいものを一揃作ること

ロ、古衣を購入又は譲り受けたる時は十分に消毒を行ふこと

ハ、裁ち方及び縫ひ方に今一層研究工夫すること

一四、子供服は次の様にしたい

一五、男児洋服は次の様にしたい

一六、女児の洋服は次の様にしたい

一七、嬰兒服は次の様にしたい

（略）

（略）

（略）

（略）





一八、農村の履物は現在の儘でよいと思ひますが、土地によつてはゴム靴などの利用を勧めたい

右は『農村生活改善指針』から、「衣服の改善」の部分を抜粋したものである。まず、第一項目は『生活改善の葉』にも書かれているもので、『農村生活改善指針』が服装改善の基本的な考え方を『生活改善の葉』から引き継いでいることを示している。『生活改善の葉』はこの項目を詳述しており、それを読むと、服装の改善は、旧慣にとらわれず服の模様や所藏数を制限し、形も簡易にすること、及び衣服それぞれの「職能」に応じて機能的にすることを求めていたことがわかる⁽¹⁴⁾。次に、農村の実情に合わせて『農村生活改善指針』に新たに付け加えられた項目が、下着の洗濯（第六項）や古着の消毒（第十三項口）といった衛生に関するものである。逆に、『生活改善の葉』にはあった、服装は男女を問わず洋装化を目指すという項目は無くなっており、これも都市ほど洋装化が進んでいない農村の実情を考慮して省かれたと考えられる。とはいえ、第九項口・ハ・ニでは男子の労働服として「シャツ」「ツボン」「詰衿洋服」が奨められており、当時、都市ほどではないにせよ農村にも洋服が普及しつつあるとみられていたことは確かであった。

冒頭でふれた民俗学の広域的調査は、どれも第二次世界大戦後に既製服が入って一変する以前の「伝統的」な野良着の姿を調べたもの⁽¹⁵⁾だが、これらの調査でわかったのは一般に伝統的で変化がないと思われがちな野良着も、実際には絶え間なく変化してきたということだった。これらの調査をもとにすると、昭和初期の野良着の状況は次のようにまとめられる。

野良着の形態は、まず（１）上半身・下半身につける衣服が分かれ

表１ 梅山一郎による野良着の分類⁽¹⁷⁾

分類	(1)	(2)		
		①	②	③
参考図				
服の説明	襷をかけ、裾を端し折り、ゆもじの色を美しく出したもの	上衣と腰まきのもの	上衣と股引のもの	着物とモンペイのもの

出典：梅山一郎『村の文化建設』汎洋社、1941年

ていない一部式構成（ワンピース）のもの（２）上半身につける衣服と下半身につける衣服が分かれている二部式構成（ツーピース）のものに大別される。そして（２）の二部式構成のものは下半身に着る衣服が、①コシマキ型②モモヒキ型③ヤマバカマ型の三つに分けられる。分類の参考として表１に、長く『家の光』で農村生活改善に尽した梅山一郎⁽¹⁶⁾による野良着の分類を示した。

表一では「襷をかけ、裾を端し折」つたものが（１）の一部式構成にあたる。「上衣と腰まき」「上衣と股引」「着物とモンペイ」は全て



写真1 男性の一般的な野良着の事例

出典：文化庁『日本民俗地図Ⅶ（衣生活）』1982年、図版16

(2)の二部式構成で、順に①②③に対応している。二部式構成になると、一部式構成とは異なり、上衣の丈が短く、袂も短くなり動きやすくなっている。また(2)のうち、②と③の下衣は、①とは異なり股が分かれている点は同じだが、②の「股引」は脚に密着する形、③の「モンペイ」は脚に密着はしない形である。民俗学の調査によれば、(2)③のヤマバカマ型の下衣には、もとは「モンペイ」「カルサン」「タツツケ」「ユキバカマ」など様々な地域ごとの名称があったが(後掲表3も参照)、梅山の表1では「モンペイ」となっている。このことについては、後述したい。

近代に入って、野良着は様々な形の underwear (①②③) の導入によってワンピースからツーピースへ(上衣が長着から短着へ)、ツーピースの中でも下衣が①から②③へと変化していった。この変化の度合いは男性の方が早く、大正末・昭和初期には全国的に既に男性の野良着は(1)のワンピースはほとんどみられず、(2)②のモモヒキ型が主流となっていたようだ(写真1)。そして、東北地方の寒冷化、関東甲信越・北陸地方の山地では、冬場の防寒着・日常着・野良着としてヤマバカマ型下衣が用いられた。

そして男性の場合、地域によっては明治末期より上衣がシャツに代



写真2 ワンピースの野良着の事例

出典：中村たかを編『日本の労働着』1988年、図3-11

わり、ズボンも野良着として用いられるなど野良着の洋装化も進んだ。当該期の農村では、家計管理をしていたのは大抵男性で、服も外出機会の多い男性のものから新調されることが多かった。⁽¹⁸⁾ 古くなった晴れ着を野良着におろすのはよくみられることで、このため男性の野良着の洋装化は早かったとみられる。たとえば、次章でとりあげる静岡県は、全国的にみても洋装化が早く進んだ地域で、大正時代の末に若者の野良着は「シャツ」が主流で、下衣も「ズボン」になりつつあった。⁽¹⁹⁾ 『農村生活改善指針』の第九項は、男性の野良着の変化を追認し、促進するための項目だったといえる。

一方、男性に比べ、女性の野良着は変化が緩やかで洋装化はほぼ進んでいないとみてよく、⁽²⁰⁾ 地域差も、よりはっきりと残っていた。東北地方では(2)③のヤマバカマ型が多く、この形態は日本列島の山間部を縦断して点在し四国に至る。⁽²¹⁾ そして平地の野良着は、関東以北での(2)②のモモヒキ型と近畿以南の(2)①のコシマキ型に分けられ、場所によっては(1)のワンピースの形態も残っていた(写真2)。

『農村生活改善指針』第一二項に書かれている「モンペ」「カルサ

ン」はどちらも(2)③にあたり、『生活改善の葉』では同じ項目にそれぞれ「東北で用ふる袴の一種」、「中国で用ふる袴の一種」と説明書きがある。『農村生活改善指針』は女性の野良着に、洋装化は求めず、和服のまま上衣の袂を短くすること、及び東日本と山間部で用いられていたヤマバカマ型の下衣を着ることを求めていることがわかる。生活改善同盟会が出した『生活改善の葉』『農村生活改善指針』の内容は、諸雑誌で報じられていった。たとえば「モンペ」の奨めは、一九三〇(昭和五)年に『婦人之友』『家の光』で報じられている。⁽²²⁾『婦人之友』は都会の家事で「モンペ」を使うことを奨めるもの、『家の光』は野良着として使うことを奨めるものだ。このうち、『婦人之友』は後述するように一九三〇年代に入ると野良着の改善にも取り組み始める。次節では、『家の光』をはじめとする諸雑誌及び団体がどのように野良着改善に取り組んでいたのかをみていきたい。

第二節 諸雑誌・団体による改良野良着普及の取り組み

戦前期の野良着改良に、最も継続的に取り組み各地に影響を与えた雑誌は、産業組合中央会が発行する月刊誌『家の光』である。一九二五年に創刊された同誌は、創刊時は二万五〇〇〇部の発行に留まったものの、編集主任梅山一郎による農村大衆向けの編集方針の成功や、賀川豊彦の連載小説『乳と蜜の流る、里』のヒットによって部数を伸ばし、一九三二(昭和七)年には二〇万部、一九三五年には一〇〇万部を超える発行部数を記録した。⁽²³⁾娯楽の少ない農村で購読者以外に廻し読みもされるなど、読んでないものはいないといわれるほど、普及した雑誌だ。また、野良着の改善には力を入れて取り組んでおり、一九二八(昭和三)年から四四(昭和一九)年までの記事を分析した高

橋知子・夫馬佳代子によれば、この間、同誌は一六種類の「農村婦人作業服」を誌面で紹介したという。⁽²⁴⁾付け加えるならば、一九二六(昭和元)年八月と九月に「簡単にできる婦人労働服」「男子労働服の拵方」が掲載されており、これが最も初期の記事であるとみられる。この最初の「婦人労働服」紹介は、生活改善同盟会で『生活改善の葉』作成に関わった高木鐸子が記事を書いている。

『家の光』の野良着改善に関する記事はおおむね、高木のような識者による誌上講習(作り方の掲載)、先進的な人や地域・団体の実践報告、懸賞金をかけての優良事例の募集、の三種類に分けられる。このうち人、地域・団体の実践報告をみると、一九三〇年代に入ってから課題に取り組んだのは『家の光』だけではないことがわかる。そこで『家の光』に限らず当時の新聞記事や各地の農会報などをみた結果、管見の限り、集落や村・郡レベルでは北海道山越郡八雲村、静岡県田方郡田中村、岡山県阿哲郡万歳村婦人会、佐賀県杵島郡橋村納手実行組合、福岡県田川郡方城村、長野県東筑摩郡産業組合が取り組み、県レベルでは山形県農会、⁽²⁵⁾山梨県教育会、岐阜県農会、山口県社会課、⁽²⁶⁾兵庫県婦人会が取り組み、⁽²⁷⁾さらに全国へ向けた取り組みも表2で示したように『家の光』以外に四つの雑誌・団体が行っている。以下、全国向けの取り組みを順に説明していきたい。

まず、一九〇八(明治四一)年に羽仁もと子・吉一夫妻によって創刊された『婦人之友』は、前述したように「モンペ」記事をいち早く掲載するなど服装の合理化に熱心で、初期から誌面で洋装化をうたっていた。同誌は、羽仁夫妻によって設立された自由学園(一九二一年創立)や『婦人之友』友の会(全国友の会は一九三〇年創立)⁽²⁸⁾が行う実践的な活動と結びつきが強い点、他の婦人雑誌と異なっている。⁽²⁹⁾

表2 諸雑誌・団体による野良着改良の取り組み

年代	『誌名』出版社	概要
1926年～41年	『家の光』 産業組合中央会	32年男女改善作業服懸賞募集 応募総数25件 35年「家の光婦人作業服」考案、販売 40年「婦人作業服」懸賞募集、畑作作業服・水田作業服決定 応募総数359件
1930年～	『婦人之友』 婦人之友社	30年女性用農業服考案 31年静岡県田方郡で「婦人農業服改良座談会」開催 33年八雲徳川農場で「婦人労働服製作講習会」開催 35年から東北農村合理化運動
1932年～	『大成』→(35年)『新興生活』 新政社→(35年)佐藤新興生活館	32年農村婦人作業服懸賞募集、販売 (37年被服協会から、「婦人農業衣」試作品実地試験を請け負う)
1933年～	『倉敷労働科学研究所農業労働調査所報告21』	33年 各地の改良農作業衣やもんぺ等数種を見本に、「農村婦人作業服」を考案
1934年～	『被服』 被服協会	34年男女「農民服」懸賞募集 応募総数19件 37年「婦人農業衣」試作品実地試験…佐藤新興生活館にも依頼

出典：『大成』19巻12号、20巻1号、20巻10号
『倉敷労働科学研究所農業労働調査所報告 21 農村に於ける衣服の問題』
『被服』5巻3号、6巻1号、8巻1号、8巻5号
『家の光』8巻2号・4号、11巻6号、17巻3号
『婦人之友』24巻5号・7号・8号、32巻3号・4号

一九三〇（昭和五）年に自由学園の生徒たちは卒業研究として「ほんとうに働きよい健康的な」「理想的労働服」考案に取り組み、三年に『婦人之友』はこの「労働服」の一つとして「農業服」を発表した（写真3^①）³⁴。『婦人之友』と友の会は、その後「持つてゐる着物を直して作れる」³⁵自分たちの「農業服」を持つて、ゆかりのある地域で座談会や講習会を開いている。次に、新政社は、内務官僚で社会教育にも尽した田澤義鋪が創設した出版社である。一九二二（大正一三）³⁶年から農村指導者向けの雑誌『新政』を出しており、のちに山下信義という人物が発行する雑誌『大成』と合併した。『大成』は一九三二（昭和七）年末から三三年にかけて読者から懸賞を募集し、女性向けの「作業服」を制定・発売している（写真3^②）³⁷。「作業服」の広告には、「能率を高め、動作を軽快にする作業服、スカートを着れば外出用に立派」³⁸と書かれていた。『大成』は三五年の読者が七五〇〇余³⁹なので規模は小さかったものの、農村の指導者向けの雑誌で、そのため農村に一定の影響を持っていた。そして一九三五年には実業家佐藤慶太郎の支援を受けて全国展開を図り、戦時中は生活改善同盟会に代わって生活改善運動全体をリードする団体となっていく。

倉敷労働科学研究所は、倉敷紡績が工場内の女工労働の研究を行うため一九二一年に設立した私立の研究所以、三七年には倉敷紡績の下を離れ東京に移転して、日本労働科学研究所となった。労働科学研究所の初代所長である暉峻義等は、Scientific Managementを批判的に取り入れ生理学の見地も加えた工場労働の効率化を研究しており、日本における労働科学の創始者である⁴⁰。三三年に、倉敷労働科学研究所は服部奉公会から助成金を受けて、農業労働の調査に乗り出した。目標としたのは、農業労働の効率化と農家主婦労働の軽減である。そし

て三五年、同所は六種類の改良野良着の見本を集め、「裁ち方が簡易」「作業が自由に出来」「廃物利用で作る」⁽⁴¹⁾ことができる新しい作業服を作製した(写真3⁽³⁾)。これを発表したのは専門的な雑誌及び倉敷市内で開かれた展覧会だったため、一般向けの雑誌に掲載した場合とは異なり直接接した者は少ない。だが識者に影響は大きく、この後、暉峻は改良野良着の専門家と目されるようになった⁽⁴³⁾。

最後に、陸軍が国民被服の改善を図る目的で創設した被服協会については、詳しくは拙稿を参照されたい。⁽⁴⁴⁾この団体は、一九二九年陸軍被服廠内に生活改善と軍民被服の近接を目指して設立されたもので、軍需品に関連する企業から資金を集め雑誌『被服』を発行していた。

同誌は、一九三四年に創立五周年記念事業の一環として「能率増進の上に、勤労を快適ならしめるために、更らに又著古し古衣服の廃品を利用し」⁽⁴⁵⁾た「男女農民服」の懸賞募集を行い、応募一九件を得ている。ただし、この懸賞募集は被服協会の予想に反して低調だったことから⁽⁴⁶⁾、三七年には『大成』の後身である佐藤新興生活館の協力を得て理想の「婦人農業衣」研究に乗り出した(写真3⁽⁴⁾)。

以上にみてきた四団体はそれぞれ『家の光』同様、識者による誌上講習(作り方の掲載)、懸賞募集を行っており、本文にはあげていないが先進的な事例紹介にも熱心だった。生活改善同盟会という「職能」に応じた機能性というコンセプトを受け継いだ上で(「ほんとうに働きよい」「婦人之友」)、「能率を高め、動作を軽快に」新政社、「作業が自由に出来」倉敷労働科学研究所、「能率増進の上に、勤労を快適」被服協会、服を新調できない農村女性でも可能な改善方法を提示した(「持つている着物を直して作れる」「婦人之友」)、「廃物利用で作る」倉敷労働科学研究所、「著古し古衣服の廃品を利用」被服協会)。

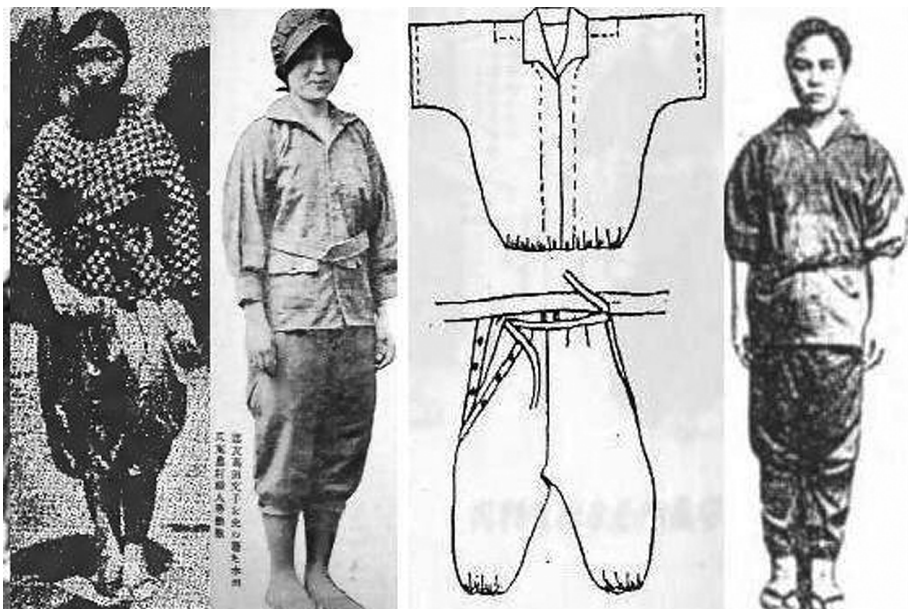


写真3 諸団体の改良野良着 左から①『婦人之友』「農業服」②新政社「農村婦人作業服」
③倉敷労働科学研究所「農村婦人作業服」④被服協会「婦人農業衣」

出典：①大日本連合婦人会編『系統婦人会の指導と経営』片岡重助、1935年 ②『大成』20巻5号、1933年(日本青年館所蔵) ③『被服』、1937年 ④『新興生活』13号、1937年

機能性を追求した結果、考案した服は写真3の通りで、どれも二部式構成でヤマバカマ型という表1(2)③に似た形になることがわかる。生活改善同盟会は(2)③を在来の、「モンペ」や「カルサン」として奨めたが、本章でとりあげた諸雑誌・団体は同じ形態の下衣を改良野良着という形で奨めたといえよう。

一方、野良着改良の対象は、男女双方に奨めた生活改善同盟会とは異なり、これらの諸雑誌・団体では対象が徐々に女性に絞られていった。これは、三二年に「男女改善作業服懸賞募集」を行ったが、四年には「農村婦人作業服」を募集している『家の光』に端的にあらわれた特徴だ。農業労働調査所の暉峻義等の場合、男性ではなく女性の改良野良着が必要と考えたのは、既に「青年壮年の間には洋服の着用が普及しつつある」⁽⁴⁷⁾という認識があったためだった。本稿で前述した、農村での服装の変化の傾向が当時も認識されていたことがわかる。この五団体のように農村の現実を把握した諸雑誌・諸団体が介在することで、生活改善同盟会が示した指針は農村へ伝えられ実践に移されていった。諸雑誌・諸団体の働きかけにより前述した道府県・市町村・集落各レベルの野良着改良が始まり、事例紹介として報道されるうちに一九三〇年代中に女性向けの野良着改良の機運が全国で高まってくる。

『家の光』が一九三二年に「男女改善作業服懸賞募集」を行った時、応募数は二五件しかなく、到底全国的な運動とはいえなかった。同誌が三五年に、三種類の改良野良着を考案して発売した時にも、編集長梅山一郎によれば「まだ農村婦人作業服の芽生え時代で」「それほど普及しなかった」という。しかし、一九四〇年末から四一年にかけて「農村婦人作業服」懸賞募集を行った時には、全国から三五九件もの

応募を受けている。⁽⁴⁹⁾これは応募件数で見れば、三九年末に行われた国民服募集の応募件数二八二より多い。⁽⁵⁰⁾当時、国民服の制定には世間の大きな関心が寄せられていたが、「農村婦人作業服」にも国民服に匹敵するほど一般に関心を持たれ、具体案を示す人が増えていたことがわかる。この募集には審査員として、生活改善同盟会服装改善調査会の斎藤佳三、従来『家の光』で野良着改善に関わった福岡安子や亀井孝子・大妻コタカをはじめ、日本労働研究所の暉峻義等、被服協会の三徳徳次郎が参加し、新政社の後身佐藤新興生活館からも審査員が出ているという点から、一九三〇年代に行われた野良着改良の集大成と言うことができる。

とはいえ、『家の光』に多数応募が来たという事実は、改良案が地域で実践されていたのかどうかを明らかにするものではないだろう。そこで、次に各地の野良着改良の実例として、静岡県田方郡田中村の事例をあげたい。

第二章 静岡県田方郡田中村の事例

第一節 静岡県における昭和初期の野良着

まず、前提として、静岡県では、田中村で広めようとしたヤマバカマ型下衣の野良着が、女性にとって一般的ではなかったことを確認したい。表3は静岡県の女性の野良着の着用状況で、大正年間のことを聞き取ったものだ。比較のため、隣県である山梨県、「モンペ」の発祥地の一つともいわれる長野県⁽⁵³⁾の状況も比較のために入れている。これを見ると明らかのように、静岡では山梨・長野に比べてヤマバカマ

表3 長野・山梨・静岡県における野良着の着用状況（女性・下衣）

	長野県			山梨県			静岡県		
	名称	実数	割合	名称	実数	割合	名称	実数	割合
コシマキ型	コシマキ	41	27%	コシマキ	106	66%	コシマキ	86	57%
	マエカケ、メエカケ	16	11%	フンドシ	1	1%	オコシ	5	3%
				ハバキ	1	1%	ユモジ	4	3%
							イモジ	3	2%
モモヒキ型	モモシキ	40	27%	モモヒキ	5	3%	モモヒキ	4	3%
	半モモシキ	2	1%						
ヤマバカマ型	ユキバカマ、イキバカマ	35	23%	カルサン	40	25%	タツツケ	2	1%
	イッコギ、ヨッコギ	3	2%	モンベ	12	8%			
	モンベ	4	3%	タツツケ	5	3%			
	モックラ	3	2%	ズボン	2	1%			
	タツツケ	4	3%	フンゴミ	1	1%			
	カルサン	4	3%						
	フンゴミ	6	4%						
	ハガマ	1	1%						
	ハツキ	1	1%						
	エッカモッカ	1	1%						
	調査地計	150	100%	調査地計	160	100%	調査地計	150	100%

出典：『長野県民俗地図』『山梨県民俗地図』『静岡県民俗地図』

注：出典は、1970年代から80年代にかけて全国で行なわれた都道府県内民俗資料分布調査の結果を図示した地図である。都道府県内民俗資料分布調査では、各都道府県内における200ヶ所程度の調査地点で、大正年間のことについて聞き取りを行なった。

型の下衣の着用が大正年間まで非常に少なかった。⁽⁵⁴⁾

民俗学の他の調査をみても、静岡県は男性の野良着の変化は非常に早かったが、女性の野良着の変化は遅かったようだ。この地域の女性たちは、場所によっては昭和に入っても、長着の裾をまくって腰巻を出した形（一部式構成）で野良仕事をしていた。同県には隣県から、カルサンやタツツケ、モンベといったヤマバカマ型の下衣が伝えられていたものの、これらは「恥ずかしい」と女性たちに嫌われ、定着しなかったのである。たとえば、磐田郡水窪町のある女性は、長野県下伊那郡からお嫁に来た人が穿いていたヤマバカマ型の下衣を山の草刈の時だけ真似してはいたが、仕事が終わるとその場で脱いだという。⁽⁵⁵⁾

また、静岡市飯間でも、お茶摘みに山梨から来た女性達が「タツツケの様な」ヤマバカマ型の下衣をはいていたが「見た目の悪さ」から地元的女性が穿くことはなかった。⁽⁵⁶⁾さらに、裾野市須山では畑作業の中で「冬は寒く、畑では桑や麦の穂が足に当たり、傷になり、風呂に入るとしみていたかった」と不便に思っていたにもかかわらず、戦時中まで「長着をはしょってお腰（腰巻―引用者注）を出」す一部式構成のスタイルは変えなかった。この地域には山梨県の郡内地方（都留郡）から女性たちがヤマバカマ型の下衣を穿いて行商に来ており、「モンベ姿をケンニヤーベー（郡内ベえ）と差別的な意識で見ていた⁽⁵⁸⁾」だったからだという。

比較のために山梨県の場合を述べると、前述した全国的動向のとおり、近代に入ってヤマバカマ型である表1（2）③が入り、服装が変化したことがわかっていく。これは長野県のヤマバカマ型下衣が伝播していったためで、たとえば京馬伸子によれば、⁽⁵⁶⁾長野県諏訪地方と隣接する北巨摩郡の村々へ、明治から大正にかけて脚にぴったりした縞

柄のタツツケ(2)②が、そして昭和初期には紺無地のゆつたりした形のタツツケ(2)③が入り、それぞれカラサンという名前で定着したという。この場合、服が定着する過程で元から地域にあったような形態の服の名前になったことは後述する次の時代と同じ現象である。一九三五年における山梨県師範学校と女子師範学校の調査では、北巨摩郡内四五ヶ村のうち、カラサンの「使用多き村」は三ヶ村に及んでいた。⁽⁶⁰⁾また、長野からの蚕種商がもたらしたという東八代郡芦川村⁽⁶¹⁾や、西八代郡山保村、北都留郡丹波山村、南巨摩郡佐野村、富士山麓の南都留郡道志村など北巨摩郡以外にも明治末から昭和初期にかけてヤマバカマ型の下衣が入り女性も着用するようになったことがわかっている。これらの村々でヤマバカマ型下衣が普及したのは「蚊・蚋の襲来を受ける事多く…素肌にては野良仕事に耐へ得ざる」山での仕事に、「山間を跋涉しても瘡を受ける事少く、且つ又冬は保温の用をなしなかな調法」⁽⁶³⁾だったからだという。このような山梨県と静岡県の差はどこから来るものだろうか。

先に女性の野良着の変化が遅い原因として、家計を管理していたのが大抵男性で、男性の服から新調されることが多かったという点をあげた。だが、民俗学の調査をみると、これに加えて女性の方が男性よりも服装の規範が厳しかっただろうことが推測される。女性のほぼ全員が一部式構成やコシマキ型を着ている地域では、ヤマバカマ型は「男まさり」で下品と批判され、逆にモモヒキ型・ヤマバカマ型を着ている地域では一部式構成の野良着を「非常にだらしない」⁽⁶⁵⁾と非難する。静岡県は一部式構成が一般的で、そのため周囲も着ている女性自身もヤマバカマ型を穿きにくかったと思われる。

写真4は、昭和初期の葎山村の写真で、葎山は田中村と同じ田方郡



写真4 葎山村における昭和初期の野良着

出典：土屋寿山監修『三島・熱海・伊豆の国写真帖』郷土出版社2006年34頁。

内にある隣村である。これは、実際に野良仕事をするときのものではないが、前列中央左の女性がほうきをもっていることからわかるように、仕事を意識したものであらうと思われる。この写真では、前列にいる女性の全員が一部式構成の野良着(1)で、中央の年配の男性がモモヒキ型(2)②となっている。彼以外の男性はシャツを着ており、洋服であるのも当時の静岡県の一般的な野良着の傾向を示している。

実は、静岡県では明治以前にヤマバカマ型の下衣(「タツツケ」「カルサン」)が入ったが、これは男性用であった。しかも、その後、男性用の下衣は「モモヒキ」が一般的になったため、一部の「老人」のみヤマバカマ型下衣をはくようになっていったという。⁽⁶⁶⁾この写真でも年配の男性はモモヒキ型を穿いており、静岡県では、「老人」のしかも「男性」がはくものとみられるようになっていたために、ヤマバカマ型の下衣を女性たちが嫌ったのではないだろうか。静岡県では、このようなヤマバカマ型下衣への抵抗感が、改良野良着導入の際に一番

の困難となった。

第二節 「三得婦人作業服」の考案と普及

静岡県田方郡田中村の改良野良着「三得婦人作業服」は、同村御門区の女子青年団長であった土屋せい氏（以下、敬称略。自身は当時既婚だったという）によって、一九三一年に考案された。彼女は考案の動機を「工業にしても農業にしても、世の進歩と共に、器械力を利用

表4 「三得婦人作業服」関連年表

年 月 日	摘要
1929年 11月	田方郡町村長会、「婦人農業服」を懸賞募集 →1930年4月3日応募作品展示
1930年 11月 26日	北伊豆地震起こる。 →31年1月から静岡県が「新興生活運動」を始める
1931年 6月 7月	田方郡町村長会、3種類の「婦人農業服」制定 婦人之友社が田方郡に取材に来る→記事は8月に掲載 →「三得婦人作業服」普及開始
1933年	倉敷労働科学研究所農業労働調査所が三得婦人作業服 他数種の作業服を参考に「農村婦人作業服」考案
1936年 10月	被服協会が考案した「シャツ」と「モンペイ」の「農 村婦人作業服」が、試着用として田中村に入ってくる



写真5 「御門主婦会 塞神社前にて（昭和七年）」

する事が段々多くなつて来ました。これはいふまでもなく能率を増進させる為であります。従つて男子の作業服が改善されて来ましたが、ひとり婦人の作業服のみは依然として旧套を脱しません⁽⁶⁸⁾と述べている。この発言の中で彼女は「能率」の「増進」という、前述した生活改善同盟会に始まる指針に則して服装を説明している点、また諸雑誌・団体同様、農村の実践者にも野良着の変化の傾向が捉えられている点が注目される。考案されたのは写真5のとおり、筒袖の上衣と「ズボン」のヤマバカマ型下衣で、「一挙に風紀安全、能率増進、健康

保全⁽⁶⁹⁾」の三つの得をもつということで「三得婦人作業服」と名付けられている。この野良着は田中村の属する田方郡の野良着改良に端を発し、主婦会と女子青年団の指導者である土屋忠作氏（以下、敬称略）、及び当時村長であった室住正和氏⁽⁷⁰⁾（同）の後援も受けてその普及が図られた。一九二九年九月、田方郡町村長会は「教化動員並公私経済緊縮ニ関スル田方郡実行項

目」を決定した。この「実行項目」は全一二項目あり、第九項は「婦人ノ労働作業服ヲ一定スルコト」⁽⁷¹⁾となっていた。これは、本稿冒頭で述べた、生活改善同盟会の示した改善策が官製の運動を通じて、農山漁村の申合せ事項に採り入れられた事例といえよう。公私経済緊縮運動はよく知られているように、旧平価による金解禁を見越し、インフレとみられていた物価を引き下げて貨幣価値を高めることを目的として、一九二九年八月に始められた運動だ。従来の生活改善運動研究では注目されていないが、田中村の「三得婦人作業服」考案はこの運動を発端としていた。

静岡県田方郡は伊豆半島に位置する二九か町村で構成された郡で、一九三〇年の国勢調査によれば人口一六万余を擁し、郡内では農業と水産業が盛んだった。⁽⁷²⁾田方郡町村長会が決定した「教化動員並公私経済緊縮ニ関スル田方郡実行項目」は新聞に掲載されたほか、印刷されて町村から各集落へ通達されている。そして、町村長会は「婦人ノ労働作業服ヲ一定スルコト」⁽⁷³⁾にもとづき、二九年一月に「働き好い風儀上から言っても体裁のよいさうして経費を要さない」「婦人農業服」懸賞募集を行った。⁽⁷⁵⁾そして一年半後の三一年六月には「娘さん向中年向、老人向」の三種類の野良着を「制定」している。⁽⁷⁶⁾

ただし、この田方郡「婦人農業服」の懸賞募集の経緯を子細に検討すると、郡民の野良着改良への意識は総じて低かったとみてよいだろう。なぜなら、募集の締め切りは一度延長されたにもかかわらず田方郡の町村数とほぼ同じ三〇点の応募しか来なかった上、野良着を「制定」したとはいえ、当初の意図とは異なり郡下で強制力を持って「一定」することはできなかったからだ。だが当時、田方郡町村長会長だった根岸時次郎⁽⁷⁸⁾や郡青年団長の花島周一⁽⁷⁹⁾が野良着改良に「大層熱

心」⁽⁸⁰⁾だったため、町村長会として野良着の改良と制定に取り組んだと考えられる。このうち、郡青年団長の花島周一は極東煉乳三島工場でもあり、同社は自由学園と関係が深かった。⁽⁸¹⁾三一年に町村長会が「婦人農業服」を制定すると、ちょうど「理想的労働服」「農業服」考案に取り組んでいた『婦人之友』は農村の先駆的な事例として取材し、郡下の町村長を集めて三島町で座談会を開いている(表2)。同郡下の田中村では、室住正和村長がこの座談会出席を機に意欲を持ち、以後、野良着改良に取り組んでいく。⁽⁸²⁾



図1 田方郡地図
大仁町教育委員会編刊『北
伊豆地震70年』2001年、2
頁を参考に筆者作成

田中村は田方郡の中央部にある村で(図1参照)一九四〇年には大仁町となり、現在は伊豆の国市となっている。一九三〇年時の同村の職業別の現住戸数を田方郡と比較すると、工業者の割合が二三パーセント(二五九/一〇九五戸)と田方郡全体の一三パーセントに比べて高いのが特徴だ。⁽⁸³⁾職工五〇人以上の工場だけでも日本金銭登録機株式会社大仁工場(職工約二〇〇人)、東洋醸造株式会社(職工約一一〇人)、石井製糸工場(職工約七〇人)があり、⁽⁸⁴⁾農村にしては工業化された地域だったといえる。農業に関しては、水稲と裏作としての小麦栽培が主で、世界恐慌が波及するまで養蚕も「各戸競って」行わ

れていた。⁽⁸⁶⁾

「三得婦人作業服」の考案と普及が図られた当時、田中村は世界恐慌・北伊豆地震の二つに見舞われ、農業の振興が喫緊の課題となっていた。このうち、まず世界恐慌と養蚕が受けた打撃については、多言は要しないだろう。田中村では、世界恐慌によって養蚕農家が受けた打撃もさることながら、田方郡随一の規模である石井製糸工場の経営が傾いたことも大きな問題だった。⁽⁸⁷⁾次に北伊豆地震は、一九三〇年一月に伊豆半島北部を震源として発生した直下型地震で（史料上は「駿豆震災」とも言われる。図1はその断層も図示している）、田方郡全域に大きな被害をもたらした。田中村でも住宅・諸工場・村営の建物が崩壊し、静岡県知事は「関東大震災二次ク惨害」⁽⁸⁸⁾に対して、新興生活運動と名付けた継続的な被災地援護を行って対処をしなければならぬほどだった。田中村では以上二つの被害に見舞われ、この時期、田畑は増えていないにもかかわらず、農業を本業とする現住戸数が増加した。恐慌の影響を受けた製糸工場は人員削減を行い、また日本金銭登録機株式会社も北伊豆地震に加えてその翌年に火災にあったことで、一九三〇年代には一時的に職工数を減らしている。⁽⁸⁹⁾工業が盛んな農村であった田中村では、工場に通いつつ農業を副業としていた村民が多く、彼らが農業を本業にしたため農業を本業とする者が増えたと考えられる。一時的に工業がうまくいかなかった同村では、⁽⁹⁰⁾農業振興が最重要の課題となった。室住正和村長以下、土屋忠作・土屋せいら指導者は震災復興と農業振興の象徴として、野良着改良に取り組んでいくこととなった。⁽⁹¹⁾

一九三一年一〇月、田方郡の野良着「制定」と『婦人之友』取材を受けて、野良着改良が始まった。まず、田中村御門区の精農者として

表彰された太田ひさに、考案者土屋せいから「三得婦人作業服」が贈呈された。その後、土屋せい、及びせいとともに醬油や味噌を共同醸造していた四人が「三得婦人作業服」を着始める。当初、この服には「異様な目が各方面から注がれ、罵の声、嘲の声」⁽⁹²⁾が浴びせられたが、土屋せい・土屋忠作の二人は、有志からの古布提供を受け、あるいは新しい布を購入して、村内の女子青年団と主婦会へ集落ごとに共同製作させ一斉に着用させることでこの服を広めた。「婦人作業服の統制運動」⁽⁹³⁾と呼ぶこの活動によって、三三年七月までに田中村内ではこの野良着が計二六四着作られたという。村長室住正和は、主婦会を設立して間接的に改良野良着の着用に寄与し、また北伊豆地震の震災記念日に「三得婦人作業服」を着て式典に出席させるよう奨励して、直接的にも「三得婦人作業服」普及を支援している。

写真5の「三得婦人作業服」は形だけではなく布も揃っているため、まるで「制服」のようにみえる。前述したように改良野良着の着用が進まない大きな要因としては、経済的要因に加え、着る立場の女性やその周囲の人々が改良野良着の形態に相当な抵抗を感じていたことがあげられる。静岡県では特にヤマバカマ型の下衣への抵抗が強く、⁽⁹⁴⁾ちに「三得婦人作業服」を他村へ広めようとした際、静岡県内からは「無力な私一人の力では、多数の人に御勧めすることは六ヶ敷い」という声や、着用者には「心ばかりの品物を上げて奨励」しているなど普及の苦労が顕著だった。田中村では女子青年団や主婦会が同じ布で一斉につくり、皆で着用することによって「三得婦人作業服」の普及を目指した。そして写真5からわかるとおり新しい野良着を着た姿で集合写真を撮ることも欠かさず、⁽⁹⁵⁾このように「制服」のようにみせることで女性たちや周囲の抵抗を払拭しようとしたと考えられる。土屋

せい・土屋忠作・室住正和の不断の努力の結果、一九三六年には改良野良着姿を「まあ感心」とみられるようになるまで、田中村の「時勢」は一変したという。⁹⁶

「三得婦人作業服」は前述のように「一挙に風紀安全、能率増進、健康保全」の三得が利点で、説明書きを詳しく読むと如何に動きやすい、働きやすいかということが繰り返して述べられている。たとえば、「手の動きが敏捷」「足が速い」「頗る活動ができる」「足軽く歩ける」などである。⁹⁸周知のように、この時期の農山漁村経済更生運動については多数の研究成果があり、運動の中で女性が全国的に組織化されていったことが明らかになっている。女性たちは、農業労働や家庭生活など多方面で改善に取組む運動の重要な担い手と位置づけられ、経済更生に貢献していった。田中村の女性の野良着改良は、経済更生運動そのものを契機として始まったわけではないが、経済更正運動同様、農業振興の必要を背景に普及が図られている。そして、働きやすさが強調されていることから、経済更生運動同様、女性の労働強化のために野良着改良が導入された事例だといえるだろう。

第一章二節でふれた『家の光』及び表2の各誌が報じた野良着改良は全て、以上に述べた静岡県田方郡田中村の事例と同じく、「制服」として制定されたものだった。服装に対する規範が根強い農村では、集落・村レベルで「制服」として「制定」するのが、女性の改良野良着着用の現実的な手段だったと考えられる。たとえば、北海道山越郡八雲村（改良野良着を着始めた年：三三年／着用の契機：『婦人之友』主催講習会、以下同様）・岡山県阿哲郡万歳村婦人会（三二年／経済更生指定村に指定）・佐賀県杵島郡橋村納手実行組合（二九年／不明）・福岡県田川郡方城村（三四年以前／農山漁村経済更生運動）

は実際に「制服」として制定し改良野良着に「一定」することができた。他方、長野県東筑摩郡産業組合・山形県農会・兵庫県婦人会では、田方郡同様に制定したものの「一定」はできなかった（岐阜県農会・山形県社会課の事例は、未調査のため不明である⁹⁹）。これらの地域ではその後、それぞれ長野県東筑摩郡島内村婦人会・山形県農会立農村女学校¹⁰⁰・兵庫県多紀郡城北村婦人会など、田中村同様に地域内の一部が実践したことがメディアに取り上げられている。これらのことから、田方郡のように郡・県レベルで「制定」しても、区域が広すぎて実効性がなく、田中村のように村や集落といったある程度狭い範囲で熱心な推進者を取り組んだ場合のみ、「一定」が可能になり野良着改良が実行できることがわかる。そして、こうした農村女性の「制服」は、「未曾有」の恐慌から復興しつつある農村の明るいニュースとして新聞・雑誌で頻繁に、かつ好意的に取り上げられた。

以上のように一九三〇年代に入り女性が動きやすい、働きやすいとして野良着改良が行われたのは静岡県内だけではなかった。右段落をみると、野良着改良が図られた地域は日本列島の中でやや西に偏っており、ヤマバカマ型の下衣がもともと東日本と山間部に分布していたことと対象をなしている。ただし、詳細にみるとからヤマバカマ型の下衣が多かった長野県でも東筑摩郡産業組合などで「制服」が制定され、全国報道はあまりされていないが山梨県でも制服制定の動きがみられたことは注目される。これらの地域では何を農村の「制服」にしようとしたのだろうか。最後に、山梨・長野県での「制服」普及運動から改良野良着の名称について考察したい。

第三節 山梨県・長野県での野良着改良

まず、山梨県では、明治時代以降長野県からヤマバカマ型の下衣が入り「カラサン」として定着したことは前述した。同県ではこれに加え、一九三〇年代に入ると女子青年団や婦人会が「制服」として制定したことで、「カルサン」「カラサン」が女性の中でさらに普及していく。一九三五年二月一日から一〇日間、山梨県教育会は「郷土教育」の一環として県教育会館において「生活更生展」という催しを開いている。「郷土教育」は地域の自然や生活・文化を教材として学ばせる教育理念で、山梨はこの教育の先進県であった。県教育会はこの理念に基づいて「生活更生展」を開き、「郷土社会の有機的な特質を研究して、その長所を保存し短所を矯め、以て農村生活及び都市生活を一層改善⁽¹⁰⁵⁾」しようとしていたのである。県下の小中学校・女子青年団・婦人会からの出品による「生活更生展」を見た、観覧者の一人はこの展覧会では「活動上、衛生上」「風儀上、経済上からも考慮せられ能率増進にも適応したる」「作業服即ち野良着的の物」が目立つという感想をもったという。確かに、この展覧会には一二の出品団体のうち五分の一にあたる二五団体が改良野良着を出品している。そして筆者が確認したところ、これらは全てヤマバカマ型の下衣をもつ女性向けの野良着であった。

これらの改良野良着は、「キリリとした身仕度で心ゆくばかり働く」(北巨摩郡教育会第二支会)、「最も働きよい」仕事着(中巨摩郡八田村)、「仕事の能率経済婦人衛生等から見ましても本当に農村の皆様にお進め致したい」(中巨摩郡西野村)、「実際使用上の便利と体裁と併せ考へ」た(中巨摩郡野之瀬村)と説明され、田中村の事例同様、

「能率」や動きやすさといった野良着改良の意義がこれらの地域にも伝わっていたことがわかる。そして、こうした改良野良着を着始めたのは、女子青年団が「自力更生は先づ『作業時の服装改善より』をモットウに」したためなどと(中巨摩郡野之瀬村)、やはり農業振興・経済更生のために導入されていた。

だが、山梨県の事例が静岡県のそれと異なるのは改良野良着はこの地域でもとから着られていた「カルサン」あるいは「カラサン」を改良した服と認識され、改良された後も「カラサン」「カルサン」と呼ばれていたことである。生活更生展開催と同時期に、山梨県師範学校・女子師範学校はそれぞれ「カラサン」に関する調査を行っており、この服は「甲州の特異性の一つ」あるいは「本県の農業用作業服として特筆すべきもの」と位置付けている。調査によれば、一九三〇年代に入ってから山梨県下の村々、特に北巨摩郡・南都留郡で「カラサン」は「大いに奨励」されつつあり、たとえば「此祖先より育まれて来たこのカラサンをよりよく利用するため、廃物利用にて、和服の美を余り損はず、よろこんで皆が着用する様工夫改良を加へ、野良着賞讃の歌まで作つてきそひ用ひて居る北巨摩郡上手村の事例などから、村の実践者にも「カラサン」が「祖先」から継承されたものと認識されていたことがわかる。同県の場合、野良着改良は郷土教育と同時に進行われ、従来の「カラサン」「カルサン」として受容された点が特徴としてあげられる。

次に、長野県の事例をみよう。表3より、長野県ではそもそもヤマバカマ型の下衣の着用率が高かったはずである。だが、同県内各市町村の経済更生計画からは、「服装改善統一」を申合せ事項の一項目としてあげたのが一九三三(昭和八)年七月には五五市町村(全三八六

市町村のうち)、三六年三月末には三三二市町村(同)にのぼったことがわかる。たとえば同県小県郡の状況を見ると、この地域では長野県内では珍しくヤマバカマ型下衣である雪袴(表3上ではユキバカマ、イキバカマ)を穿く習慣があまりなかった。これは女性の仕事为主に屋内での養蚕とされ野良仕事には出なかったためである。⁽¹⁰⁾だが、昭和に入って雪袴と短着の野良着がみられるようになった。ヤマバカマ型の下衣を初期にはき始めた小県郡塩尻村の女子青年団の場合、会長である北沢梅子が「好景気時代に非常な華美となり、それがいつまでも抜けきらぬ」村の風俗を改革しようとして「モンペ」を团服として制定したという。⁽¹¹⁾一九三五(昭和一〇)年の小県郡では、郡内三町三〇ヶ村のうち一九ヶ村で、婦人会が「雪袴」を下衣とする改良野良着を制定し「勤劳精神の鼓吹」に努めていた。⁽¹²⁾そして、こうした改良野良着を着て「田草取、農救土木工事等々」を行うことがこの地域の女性たちの「流行の一つ」になった。⁽¹³⁾同県でも、山梨県同様、従来から穿かれていた「ユキバカマ」として改良野良着が広められたことがわかる。

山梨・長野の両県では前掲表3からわかるように、大正時代からヤマバカマ型下衣の着用率が静岡県よりは高かった。だが、一九三〇年代の改良野良着の普及運動によって、この形態の下衣を着用する地域が広がるとともに、着用の密度が高くなったのである。

おわりに

本稿では、近代に入って徐々に進みつつあった上下二部式でヤマバカマ型下衣の野良着への変化が生活改善運動によって促進されたこと

を示した。まず、生活改善同盟会は一九三一年の『農村生活改善指針』で、働きやすく「機能的」だと男性へは洋服を、女性へは「モンペ、カルサンの類」を改良作業着として奨めた。「モンペ」「カルサン」は表1のヤマバカマ型の下衣にあたり、「類」としたのは、この形態の下衣には「モンペ」「カルサン」のほか「タツツケ」「ユキバカマ」など地域ごとの名称があるため、農村の実情に即して変えてほしいという趣旨であった。生活改善同盟会の指針に基づき「家の光」をはじめとする諸雑誌・諸団体は「農業服」「農村婦人作業服」「婦人農業衣」といった改良野良着を考案したほか、各地の実践例を紹介して、農村への普及を図る。この際、既に男性の野良着は洋装化しつつあったので、女性にのみ改良が勧められることとなった。農村各地では農山漁村経済更生運動の中で、あるいは更生運動という名称ではないが同じく農業振興の必要がある中で、女性の労働を促進する目的で改良野良着着用が推進された。

一九九〇年代までの民俗学の調査によれば、①女性がヤマバカマ型下衣を穿かない地域 ②女性がヤマバカマ型下衣を穿く地域 の二地域がほぼ本州を二分しており、本稿では①の事例として静岡県を、②の事例として隣接する山梨・長野県をとりあげた。改良野良着は、①の地域では静岡県田方郡田中村の「三得婦人作業服」のように新しい服として、②の地域では「祖先」から継承してきた「カラサン」や「ユキバカマ」ととらえられて、普及し定着した。農村の女性は地域の服装の規範に沿うことが男性よりも強く求められていたため、①の地域では着慣れず見慣れない改良野良着の普及は非常に難しかったが、地域の指導者は服の形だけでなく生地も揃えた「制服」として一斉に着用させることによって、地域内への普及を図っていく。こうした農

村女性の「制服」はメディアで報じられて全国へ広まり、『家の光』によって集約されて、一九四一年に最終的な改良野良着の考案が行われた。

一九三七（昭和一二）年に日中戦争が始まり「非常時」の服装が問題になると、よく知られているように「モンペ」が急速に広まる。『洋服と日本人』を書いた井上雅人は、女性の国民服として政府が普及させたがっていたのは洋服型の標準服で、当時広まっていた「モンペ」は政府審議会ではかえって批判的だったことを指摘した。また、アンドルー・ゴードンは、Ann L. Hollander, *Sex And Suits* にも依拠しながら、「モンペ」によってこれほど多くの女性が速やかに「スラックス」を穿くようになったことは世界的にも異例だと述べている。⁽¹⁷⁾

「モンペ」は『農村生活改善指針』にも出てくるようにヤマバカマ型の下衣の一種で、名称としては秋田・山形・青森県など東北地方に多く分布していたという。⁽¹⁸⁾ 筆者は、「モンペ」が当局の批判を超え非常に速やかに普及した要因として、一九三〇年代に行われた改良野良着の普及が受容の下地になったことを提起したい。受容の下地というのは次の二つの点においてである。

第一に、改良野良着の普及によって、ヤマバカマ型下衣を着用する地域が広がるとともに、着用の密度が高くなった。とりわけ、前述した①の地域では一九三〇年代前半に、女性の野良着に対する規範が変化した点は重要である。静岡県では、ヤマバカマ型下衣への抵抗が強く、ところによっては戦後に進駐軍が来ると聞いて「モンペ」に穿きかえたほどだった。だが、改良野良着が「感心」とみられるようになっていた田方郡田中村では戦時中には「モンペ」を穿いていたといい、実際に田中村の町誌編纂資料には三七年と四〇年にヤマバカマ型

下衣を穿いて作業する女性たちの写真が残っている。⁽¹⁹⁾ 同村で「モンペ」着用が早まったのは、それまでの生活改善運動の成果であったと考えられる。同様の運動をしていた①の地域でも同じような意識の変化が起こっていたのではないだろうか。第二に、全国の野良着改良運動によってヤマバカマ型下衣は「女性」の「勤労」の象徴となった。

一九三〇年代に仕事着改良が提唱される以前、前述②の地域ではヤマバカマ型下衣を男性も、また労働者だけではなく防寒着として着用していた。たとえば、最も初期の調査である『山袴の話』では、福島県耶麻郡姥堂村（現北川市白川町）から「モンペ」「サルツパカマ」は男女ともに町に出るときや「遠道」するときに用いられることが報告されていた。また、『日本の労働着―アチック・ミューゼウム・コレクション―』でもやはりヤマバカマ型下衣が、東北地方の寒冷地、関東・甲信越・北陸の山地帯では男女ともに着用し日常生活・外出用にも用いられていたと解説されている。⁽²⁰⁾ 防寒着として穿く場合、下衣はたっぷりと布を使つて袴のように作つてあり、雪にふれないよう着物を入れて穿けるようになっていたのである。ところが、野良着改良の動きが広まるとともに、多くの場合メディアでは「女性」の「労働」着としてのみ、ヤマバカマ型下衣が報道される。その結果、全国的にこの形の下衣と「女性」の「労働」のイメージが結びついたのではないだろうか。日中戦争が始まり「非常時」になると平常時に増して、「働く」女性、国家や社会に奉仕し貢献する女性が求められる。政府の審議会でいくらか格好が悪いと批判されても、その実用性（動きやすさ）とともに女性の「勤労」のイメージと結びついたことによってヤマバカマ型下衣は防空演習や勤労奉仕を機に広まり、その動きを政府が止めることはできなかったのである。

最後に、表1にあげた一九四一（昭和十六）年の本で「モンペ」がヤマバカマ型下衣の代表例とされていることからわかるように、一九三七年以降、①②の地域を問わず同種の服は、「モンペ」という名称へゆるやかに統合されていった。⁽¹²⁾これがなぜ「モンペ」であって「カルサン」や「ユキバカマ」ではないのかという点については、三十七年以前から都市部で報じられる時にはヤマバカマ型下衣を「モンペ」と呼ぶ傾向があったことが示唆できる。表2の被服協会の項で示した「婦人農業衣」試作品実地試験は表3の田方郡田中村では三十六年一月に実施されているが、この時の下衣（写真3④）は「モンペイ」と称されていた。また、一九三〇年という『婦人之友』の初期の記事も「カルサン」ではなく「もんぺいを使いませう」となっている。『婦人之友』は三八年二月の記事でも「もんぺい」を穿く美談を掲載しており⁽¹³⁾「カルサン」や「ユキバカマ」と呼ばないのは、創立者羽仁もと子⁽¹⁴⁾が青森県出身で「モンペ」という名称のほうに慣れていたからだろうと推測される。このように、一九三〇年代前半に似たような服が広まり、その名称が「モンペ」に統合されたことによって、「モンペ」は急速に普及したと考えられる。

※本稿は、第一〇六回史学会大会日本史部会（近現代）の研究報告「農村生活改善運動による「もんぺ」の普及」（二〇〇八年十一月）を元とし、二〇〇九～二〇一一年度文化学園大学文化ファッション研究機構からの助成（共同研究 研究代表者井上和枝「日朝における生活改善運動と衣生活の近代化」）の成果の一部である。

註

- (1) 生活改善同盟会の組織及び活動内容全般については、磯野さとみ『理想と現実の間に——生活改善同盟会の活動——』昭和女子大学近代文化研究所、二〇一〇年を参照。
- (2) 第一次大戦中・大戦後から取り組まれたこの種の運動は、内務省による民力涵養運動（一九一九年三月内務省訓令第九四号より）、文部省による生活改善運動（一九一九年七月文部省訓令第六号、八月文部省訓令第七号・第八号、二〇一〇年一月生活改善同盟会設立）、農商務省による世帯の会設立（二〇一〇年八月）が始まりとなっている。このうち、生活改善同盟会の活動が著名で、本稿で述べる通り方針のちにも影響を与えてきた。研究史上も、「生活改善運動」と呼称されており、本稿もこの呼称を用いる。
- (3) 久井英輔『昭和前期における生活改善中央会の組織と事業』『兵庫教育大学研究紀要』三二号、二〇〇七年九月。
- (4) 段瑞聡『蒋介石と新生活運動』慶應義塾大学出版会、二〇〇六年。深町英夫『身体を躰ける政治——中国国民党の新生活運動——』岩波書店、二〇一三年。
- (5) 田中宣一編『暮らしの革命——戦後農村の生活改善事業と新生活運動——』農山漁村文化協会、二〇一一年。同『自編著研究紹介生活改善諸活動を考える』『生活文化史』六五号、二〇一四年三月。
- (6) 前掲『暮らしの革命』一一頁
- (7) 筆者は、大門正克が主宰する「農家族史研究会」において、新生活運動協会が発行する『新生活通信』『新生活特信』を通読した（この成果は二〇一二年に大門正克編『新生活運動と日本の戦後』日本経済評論社としてまとめられている）。新生活運動協

会は政府や、戦前から政府と密接に関係してきた人々による生活改善運動という点で、生活改善同盟会の系譜を引き継いでいると思われるが、新生活運動協会の中で一九五〇年代に「大政翼賛会のようにならないように」という論点が出ていた点が注目される。

(8) 前掲『暮らしの革命』四三九ページ

(9) 宮本勢助の調査は、大日本連合青年団編刊『山袴の話』一九三七年及び、加藤幸治「宮本勢助の服飾研究と『全国山袴方言調査紙』調査の意義（宮本勢助『山袴全国方言調査紙（昭和九年）』）」「東北学院大学論集 歴史と文化」四八号、二〇一二年参照。瀬川清子の調査は、瀬川清子『きもの』六人社、一九四二年及びLisa Critchfield Dalby “Kimono: Fashioning Culture” Univ of Washington Pr. 二〇〇一参照。

文化庁は一九六二年度から三年間にわたって民俗資料緊急調査を行い、服装についての成果は文化庁編刊『日本民俗地図Ⅷ（衣生活）』一九八二年にまとめられた。また、国立民族学博物館では一九八〇年より「日本在来の労働衣服の比較研究」を始め、一九八八年には中村たかを編『日本の労働着―アチック・ミュージゼアム・コレクション―』源流社が出版された。さらに、神奈川県大学日本常民文化研究所では一九八四年より調査を始め、『仕事着』東日本編・西日本編、平凡社、一九八六・一九八七年を発表している。

(10) 文化庁の民俗資料緊急調査ののちに行われた各都道府県の民俗資料緊急調査は、一都道府県における調査箇所を三〇ヶ所程度から二〇〇ヶ所程度へ増やし調査密度を高めたこと、聞取りに際し大正年間のことを基本として、その前後の変遷を明確にしようと

した点が異なっている（天野武「『都道府県内民俗文化財分布調査報告書』復刻の意義」）

(11) 生活改善同盟会編刊『農村生活改善指針』一九三二年、一頁。

(12) 磯野さとみ前掲書、二八～二九頁。

(13) 前掲『農村生活改善指針』

(14) 生活改善同盟会編刊『生活改善の栞』一九二四年「服装全般に関する事項」

(15) たとえば、文化庁編刊『日本民俗地図Ⅷ（衣生活）』一九八二年の「序」では、「近時の急激な社会の進展、生活の変容」によって「わが国の伝統的な生活様式・風俗習慣を急変させ」たためと調査の動機を語っており、また神奈川県大学日本常民文化研究所編『仕事着 東日本編』平凡社、一九八六年の「仕事着調査の方法とねらい」でも、調査する「仕事着」を「伝統的な労働衣服」と定義している。さらに国立民族学博物館が、『日本の労働着』を調査したのは、「日本在来の労働衣服の比較研究」という題目であった。

(16) 梅山一郎については、板垣邦子『昭和戦前・戦中期の農村生活―雑誌『家の光』にみる―』三嶺書房、一九九二年、四七～五三頁および、河内聡子『『家の光』の誌面改良―梅山一郎の編集態度を中心に―』『リテラシー史研究』四号、二〇一一年参照。

(17) 梅山があげた分類のうち「和服にエプロン」「アツパツパ」の二種類は、例外的なものとみられるため省略した。「和服にエプロン」は後述する写真4の前列中央の女性が着ており、また「アツパツパ」は山梨県の女子師範学校が置かれていた加納岩町では家庭の日常着として広がりつつあったという記述はあるものの

(山梨県女子師範学校・山梨県女子師範学校編刊『微細郷土研究―加納岩町に關する―』一九三七年、三一―三頁)、民俗学の広域的調査では着用されたという事例がほとんど出てこないためである。

- (18) 板垣邦子『日米決戦下の格差と平等』吉川弘文館、二〇〇八年、二―三頁。

- (19) 静岡県教育委員会編刊『静岡県文化財調査報告書一七集』一九七八年、一三四。京馬伸子・岡本靖子「静岡県の仕事着」神奈川大学日本常民文化研究所編『仕事着 東日本編』平凡社、一九八六年、二七三・二七五頁。ここでいう「シャツ」は現在思い浮かべるようなワイシャツではなく、スタンドカラーのシャツで手作りもできるという(服部照子・辻本治代・岡本茂子「静岡県における伝統的仕事着の様式―実態調査資料をもとにして―」『日本大学文理学部(三島)研究年報人文・社会科学編』二六号、一九七七年、三五八―三五九頁)。

- (20) 前掲『日本民俗地図Ⅳ(衣生活)』

- (21) 山崎光子「服飾様式の変容と文化領域―日本海域としての新潟の視座から見た」『民俗服飾研究論集』五号、一九九二年三月、三九頁。

- (22) 「もんぺいを使いませう」『婦人之友』二四卷一号、一九三〇年一月。

- (23) 前掲『昭和戦前・戦中期の農村生活』五三頁。

- (24) 高橋知子・夫馬佳代子「『家の光』における農村婦人作業服の変遷とその背景―昭和十五年の懸賞募集を中心に―」『衣の民俗館・日本風俗史学会中部支部研究紀要』四号、一九九四年、表一。

- (25) 『家の光』二卷八号・九号、一九二六年八月・九月

- (26) 『被服』六卷一号、一九三七年一月

- (27) 前掲『山袴の話』、六九頁。大阪府立中央図書館所蔵『生活改善』九卷一〇号、一九三三年一〇月、五九―六〇頁。

- (28) 東京朝日新聞一九三三年一月一〇日「制服の村」

- (29) 東京朝日新聞一九三三年九月二三日「制服はモンペイ姿」、『主婦之友』一九卷九号

- (30) 『岐阜県農会報』七卷八号、協同会編刊『農村生活改善の話』一九三四年、『家の光』八卷四号、『大成』二〇卷二号

- (31) 『山口県農会報』三三〇号、前掲『農村生活改善の話』、『家の光』八卷四号、『大成』二〇卷二号。

- (32) 『兵庫教育』五二三号(一九三三年)

- (33) 野本京子「東北農村生活合理化運動前史 戦前期『婦人之友』友の会の実践」『東京外国語大学論集』七一号(二〇〇五年)、野本京子「戦前から戦後における『婦人之友』友の会の農村生活改善運動 農村友の会の活動を中心に」『東京外国語大学論集』七七号(二〇〇八年十二月)、渡瀬典子「雑誌『婦人之友』『友の会』活動における二〇世紀後半の農村生活改善」『岩手大学生涯学習論集』五号(二〇〇九年三月)、小関孝子『生活合理化と家庭の近代=Rationalization of Life and Modernization of Home: 全国友の会による「カイゼン」と『婦人之友』』勁草書房、二〇一五年を参照。

- (34) 「労働婦人の服装研究」『婦人之友』二五卷七号、一九三一年七月。

- (35) グラビア『婦人之友』二五卷七号、一九三一年七月

- (36) 山下信義と、彼が東京に進出して設立した佐藤新興生活館について、松田忍『雑誌『生活』の六〇年―佐藤新興生活館から日本生活協会へ―』昭和女子大学近代文化研究所、二〇一五年参照。付け加えるならば、山下は、一九三七（昭和一二）年に国民精神総動員運動が始まると政府の「社会風潮に関する調査委員」に選ばれ（『国民精神総動員』二号三面）、東京市でも山下の唱えた一事貫行が総動員運動のスローガンに使われるなど、この面でも大きな影響を及ぼした。
- (37) 日本青年館所蔵、「農村婦人向きの改良服を募る（新政社）」「大成」一九卷一二号、一九三二年二月。広告「農村婦人の作業服が出来ました」「大成」二〇卷一〇号、一九三三年一月。
- (38) 広告「農村婦人の作業服が出来ました」「大成」二〇卷一〇号、一九三三年一月。
- (39) 前掲『雑誌『生活』の六〇年』九頁、引用部分より。
- (40) 一八八九―一九六六年。東京帝国大学医学部卒、倉敷労働科学研究所所長、日本労働科学研究所所長。（佐々木聡『科学的管理法の日本的展開』有斐閣、一九九八年、九―一〇頁ほか）。
- (41) 倉敷労働科学研究所編『更生展覧会概要』農村更生協会、一九三五年、三九頁。
- (42) 前掲『更生展覧会概要』。倉敷労働科学研究所編刊『倉敷労働科学研究所農業労働調査所報告二―農村に於ける衣服の問題』一九三六年。
- (43) 一九三八年一月二五日『読売新聞』『「国民服」の前提として制服を語る／モンペよ進歩せよ／だが、地方的条件無視は困る／日本労働科学研究所長暉峻義等氏』
- (44) 「昭和初期における被服協会の活動」『社会経済史学』七六卷一号、二〇一〇年五月。
- (45) 『被服』五卷三号、一九三四年、とじこみ
- (46) 「懸賞農民服に就て」『被服』六卷一号、一九三五年一月。
- (47) 暉峻義等「農村の衣服に関する概説」前掲『倉敷労働研究所農業労働調査所報告二一四―五頁。氏は同書で、洋装化普及の要因を「青年団組織とその服制の統一化」に求めている。
- (48) 「男子用女子用改善作業服の裁ち方縫い方募集」『家の光』八卷二号、一九三二年二月。『家の光』八卷四号、一九三二年四月。二五件の応募を受けて「自転車用袴」「農村婦人作業服」「女子改善作業服」「男子改善作業服」の四着を決定した。
- (49) 『家の光』一六卷二二号（一九四〇年十一月）に募集広告を載せ、一七卷二号（一九四一年二月）で当選者を発表している（梅山一郎「婦人の畑作及水田作業衣について」『被服』一二卷四号、一九四一年四月、六〇―六一頁）
- (50) ただし、『家の光』募集後の一九四一年末に行われた婦人標準服懸賞募集への応募数六四八よりは少なかった。国民服・婦人標準服懸賞募集の異同と詳細については、井上雅人「洋服と日本人―国民服というモード」廣済堂出版、二〇〇一年参照。
- (51) 『家の光』は、大妻女子大学の創始者大妻コタカのほか東京府授産場の福岡安子・亀井孝子の二人に依頼して、野良着改良を図っている。
- 福岡は、一八八八年生、女子師範学校・津田英学塾卒業後に渡米、帰国後女子の洋装改善に尽し、東京府副業奨励会設立と共に渋谷授産場長となった（村上秀子編『昭和十四年婦人年鑑』東京

連合婦人会、一九三八年)。亀井も一九二〇年には家庭職業研究会の専務理事で(内田茂文・佐藤順造編『婦人年鑑』一九二〇年)、後に中野授産場長となった。

(52) 審査員は、次の一八名である。

竹内茂代(井出病院長、医学博士)、今和次郎(早稲田大学教授)、斎藤佳三(厚生省嘱託)、武島一義(厚生省生活課長)、丹野せつ(厚生省工場監督官補)、大妻コタカ(大妻学園長、福岡安子(東京家庭副業奨励会)、水野常吉(佐藤新興生活館常務理事)、伊藤博(大政翼賛会生活指導部)、亀井孝子(東京中野授産場長)、成田順子(東京女子高等師範学校)、鈴木庫三(内閣情報局)、暉峻義等(日本労働研究所長)、瀬口正史(東京日日新聞社事業部長)、三徳徳次郎(被服協合理事)、亀井貫一郎(大日本国民服協合理事長)、中田虎一(大日本国民服協合理事長)、丹羽四郎(農林省経済更生部)。

以上、「作業服制定委員」『家の光』一七卷二号、一九四一年二月。

(53) 今和次郎『今和次郎集 第七巻 服装史』ドメス出版、一九七二年

(54) この聞き取り調査では表1(1)の一部式構成と(2)①の一部式構成でコシマキ型の区別があまりつかないことをこわっておきたい。

(55) 繁原幸子「静岡県下モンペ事情 その意識と変化」『女性と経験』二八号、一九九八年、六五～六六頁

(56) 前掲「静岡県下モンペ事情」六七頁

(57) 静岡県教育委員会文化課県史編さん室編『須山の民俗』裾野市、

一九九二年、七九～八〇頁

(58) 同右。

(59) 「仕事着の流行 諏訪から北巨摩を考える」『長野県民俗の会通信』七〇号、一九八五年十一月。

(60) 山梨県師範学校・山梨県女子師範学校編刊『総合郷土研究』一九三六年、六五六頁

(61) 高橋晶子「カルサンかモンペか―富士山北麓の山袴―」『民具マンスリー』三九巻八号、二〇〇六年。

(62) 前掲『日本民俗地図』

(63) 前掲『総合郷土研究』六五六～六五七頁

(64) 福井貞子『ものと人間の文化九五 野良着』法政大学出版局、二〇〇〇年、六二～六三頁、一九九～二〇〇頁。

(65) 瀬川清子『きもの』六人社、一九四八年、一六〇～一六一頁

(66) 前掲「静岡県の仕事着」

(67) 前掲『須山の民俗』七九頁。

(68) 「農事能率向上に熱烈なる農村婦人作業服の普及―静岡県田中村の土屋せい子さん」『週刊婦女新聞』一七二八号、一九三三年七月二三日

(69) 前掲「農事能率向上に熱烈なる農村婦人作業服の普及」

(70) 一九一八年一〇月から郡制が廃止されるまで、後述する田方郡町村会長根岸時次郎の下で田方郡書記(田方郡役所編刊『田方郡制録』一九二三年、七〇頁)、その後二六年～三八年まで田中村村長を務め、三二年～田方郡町村長会長も兼務した。

(71) 沼津市明治史料館所蔵、田方郡西浦村足保区有文書B-a-4 田方郡町村長会「教化動員並公私経済緊縮二関スル田方郡実行項

目

八月、七〇頁

- (72) 田方郡は、一九三〇年の時点では、三島町・修善寺町・伊東町・網代町・熱海町の五町、函南村・韭山村・田中村・北狩野村・下狩野村・中狩野村・上狩野村・錦田村・北上村・中郷村・川西村・江間村・内浦村・西浦村・戸田村・土肥村・西豆村・対島村・小室村・下大見村・中大見村・上大見村・宇佐美村・多賀村の二四村、計二九町村で構成された。

- (73) 静岡県編刊『静岡県統計書』一九三〇年版

- (74) 前掲「教化動員並公私経済緊縮ニ関スル田方郡実行項目」

- (75) 田方郡西浦村役場文書A・C・一六町村往復綴「婦人農業服考案懸賞募集趣意書」

- (76) 「モダンな作業服」『東京朝日新聞』一九三二年六月一六日

- (77) 田方郡西浦村役場文書A・C・一六町村往復綴によれば当初一九三〇年一月三一日だった応募締切は三月一五日に延び、同時に「御心当リノ向ニ対シ精々御勧誘被下」たいとの通牒が各町村長宛に出されている。

- (78) 生没年不詳 一九二三年三月～二六年六月田方郡長、一九二六年一〇月六日～三〇年一〇月まで三島町長及び田方郡町村長会長（三島市誌編纂委員会編『三島市誌 中巻』三島市、一九五九年、二五〇・二五四頁）

- (79) 一八九三年に花島煉乳創設者である花島兵右衛門の五男として生まれ、一九一九年北海道帝国大学農学部を卒業、シカゴ大学で酪農学を学んだ後、花島煉乳が合併した極東煉乳株式会社で三六年まで役員と三島工場長を務めていた。

- (80) 「婦人農業服改良座談会」『婦人之友』二五巻八号、一九三一年

- (81) 『婦人之友』二五巻九号（一九三一年九月、二二〇頁）によれば、極東煉乳株式会社は自由学園の消費組合部にバターや煉乳を販売しており、周一の夫人は『婦人之友』の愛読者であった（『婦人之友』二五巻八号、七〇頁）。極東煉乳三島工場では、自由学園の卒業研究で作られた「理想的労働服」のうち「工場服」も早速購入している。

- (82) 前掲「農事能率向上に熱烈なる農村婦人作業服の普及」

- (83) 静岡県編刊『静岡県統計書』一九二五、三〇、三五年版

- (84) 静岡県警察部編刊『駿豆震災誌』一九三二年付属

- (85) 田二一九町、畑一九二町を有し、農家の一戸平均耕作地は七反九分（静岡県編刊『静岡県統計書 昭和五年版』）。

- (86) 副業としては、椎茸・野菜（大根）・果物（みかん）栽培、藁加工、家畜（豚・乳牛）飼養があり、生産した米や近隣から買い集めた米を精米して伊東の温泉旅館へ売る、各種商品の行商、山林の植林・下刈・伐採、金山の採掘作業への出稼ぎなどの「農間稼」があつたという（大仁町文化財保護審議委員会編『大仁町誌編纂資料』各巻大仁町教育委員会）。

- (87) 石井製糸工場は世界恐慌によって採算がとれなくなり、人員削減もしたが三七年には倒産してしまった（一九三七年一二月二七日付静岡新報。記事上では、伊豆製糸株式会社の名前になっている）。

- (88) 前掲『駿豆震災誌』三頁

- (89) 日本金銭登録機株式会社は三一年に工場の三分の二が焼けたこともあって経営が不安定となり（東京大学経済学部図書館所蔵

『日本金銭登録機株式会社営業報告書』二三期、三三期、三七期) 一時人員を削減した。

- (90) 田中村の工業は比較的早く復興したとみられる。石井製糸工場は倒産してしまったものの、日本金銭登録機株式会社は火事のあとナショナルと提携、四〇年代に入るとナショナルの工場になった(前掲『日本金銭登録機株式会社営業報告書』各年度)。「三島市誌」によれば、金属工業は三〇年代後半から順調に生産を伸ばしている。さらに、村内にあった東洋醸造株式会社も三七年以降、特に酒の売りあげを伸ばした(東京大学経済学部図書館所蔵『東洋醸造株式会社営業報告書』各期)。

- (91) 以後、「三得婦人作業服普及」の記述は前掲『週刊婦女新聞』記事及び、J.C.総研所蔵日本農業文庫にある、土屋忠作「三得婦人作業服普及及計画実行」静岡県社会課編刊『国民更生運動に関する資料第二輯 生活改善実行事例』一九三三年。土屋忠作「改善に改善を加へたる三得婦人作業服と其の普及」静岡県社会課編刊『国民更生運動に関する資料第四輯 生活改善実行事例』一九三五年による。

- (92) 前掲「農事能率向上に熱烈なる農村婦人作業服の普及」

- (93) J.C.総研所蔵日本農業文庫、土屋忠作「婦人作業服の統制運動と基本金の造成」静岡県社会課編『国民更生運動に関する資料第五輯 生活改善実行事例』一九三五年

- (94) 土屋忠作「三得婦人作業服普及及計画実行」

- (95) 一九三七年には中島主婦会で「室住村主婦会長並に土屋忠作氏(作業服調整(ママ。調製力)幹旋者)を迎えて」「新に調整(ママ)せる作業を着し一同記念撮影」したとある(大仁町文化財

保護審議委員会編『大仁町誌編纂資料 第一輯 神島・中島区史』大仁町教育委員会、一九九三年、一七二頁。この部分は中島主婦会の記録による)。

- (96) 土屋忠作「婦女作業服能率増進は作業服の改善から 三得婦人作業服の作成を奨む」『静岡県農会報』四〇巻九号、一九三六年六月五九頁

- (97) 『週刊婦女新聞』一七二八号(一九三三年七月二三日) 四面には、土屋せいが「三得婦人作業服の特色」として次のように書いている。

(一) 上衣と下衣とが別々に作つてあるから、洗濯が部分的に来る。

(二) 袖はワイシャツ「ママ」のやうになつていたので、手の動きが敏捷に出来る。

(三) 下衣が半ズボン型になつていたので歩くのに足が速い。

(四) バンドを附けてあるから帯がいらぬ。

(五) 筒袖であるから襷がいらぬ

(六) 下衣の裾をくくつてあるから風紀上からも安全である。

(七) 別段に気がねするに及ばないから頗る活動が出来る。

(八) 寒風にも犯されない。

(九) ブトに喰はれる憂ひがない

(一〇) 田の草を取るにも股のこする恐れがない。

(一一) 上衣の袖にホックをつけてあるので伸縮が自在である。

(一二) 上衣の襟が和服のやうだから乳をのませるのに差支へない

(一三) 安全第一を期した為に用便に就てとかくの評があるが、

実用者は文句なしに後紐を解いて容易に用をたしている。

(一四) 写真に撮つて比較して見たが、感じは決して他の服装に劣らない。

(一五) 足軽く歩けるから婦人の行商者にも適している。

以上によつて判る通り、一挙に風紀安全、能率増進、健康保全の三得を有するので、此の名を冠したのであります。

(98) 右参照。このほか、帯や襷がいらない(四)(五)、上衣の伸縮が自在(一一)も活動しやすいという利点を述べていると考えられる。

(99) ただし山口県の場合、水谷由美子ほか「モンベとサルツパカマをリデザインした農作業着の服飾デザイン」『山口県立大学学術情報』七号、二〇一四年を読むかぎり、同県での改良野良着普及の歴史は既に忘れられていると思われる。

(100) 『家の光』一〇巻五号、東京朝日新聞一九三三年十一月一日「制服の村」

(101) 東京朝日新聞一九三三年九月二三日「制服はモンベイ姿」、『主婦之友』一九巻九号

(102) 農林省経済更生部編刊『婦人の経済更生活動事例二』一九三四年。前掲『倉敷労働科学研究所農業労働調査所報告二二』

(103) 郷土教育については、伊藤純郎『増補 郷土教育運動の研究』思文閣出版、二〇〇八年(初版は一九九八年)。外池智『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究』NSK出版、二〇〇四年。参照

(104) 前掲『総合郷土研究』序

(105) 以後、展覧会の記述は山梨県立図書館郷土資料室所蔵、『山梨

教育』四四九号、一九三五年八月による。

(106) 「カラサン」前掲『総合郷土研究』

(107) 山梨県立女子師範学校編刊『微細郷土研究』一九三七年、三一三頁。

(108) 前掲『微細郷土研究』三一三頁

(109) 長野県開拓自興会満州開拓史刊行会編刊『長野県満州開拓史総編』一九八四年、一三五～一三七頁。同書の出典である『産業之礎』二五四号(一九三三年八月)。県立長野図書館所蔵、長野県編刊『昭和十年度農村経済更生計画進捗状況』一九三六年、附表でも確認。

(110) 長野県『長野県民俗編1(1)東信地方』県史刊行会、一九八七年、四三二頁。

(111) 信濃毎日新聞一九三四年九月一日五面「農村非常時を聴く／上小女青团長訪問記(2)塩尻村双葉会長北沢梅子さん談。彼女は記事によれば、『家の光』と『婦人之友』を読み、村内で研究会を開いているという。両誌の農村への影響力の一端を示すものだろう。

(112) JC総研所蔵日本農業文庫、産業組合中央会長長野支会編刊『長野県産業組合青年連盟並婦人会活動状況』一九三五年。

(113) 信濃毎日新聞 一九三四年九月二十日

(114) 服飾の分野では二〇一〇年代に入って経営分析が進み、戦前のアパレル産業の勃興期について明らかにしつつある(山崎広明・阿部武司『織物からアパレルへ』大阪大学出版会、二〇一二年、第二章縫製加工業への進出。岩本真一『ミシンと衣服の経済史』思文閣出版、二〇一四年、第三章中規模工場の経営動

向など)。これらが研究する企業は作業着を販売しており、いずれは農村の洋装化、なかでも男性の洋装化とつながる可能性があると考えられる。また、『乳と蜜の流るゝ里』を書いた賀川豊彦によって、一九二一年から農村男性向けの制服「賀川服」というものが売り出され、一定の需要があったという事実もある。農村男性の制服と洋装化については別稿を期したい。

- (115) 井上雅人『洋服と日本人―国民服というモード―』廣済堂出版、二〇〇一年

- (116) New York : Alfred A. Knopf, 一九九四年

- (117) 『ミシンと日本の近代―消費者の創出―』みずす書房、二〇一三年、一二二頁。

- (118) 前掲『日本民俗地図』解説、一七頁

- (119) 『大仁町誌編纂資料第一三集 白山堂村史』大仁町教育委員会、一九九六年、口絵。『大仁町誌編纂資料第一五集 宗光寺村史』同、二〇〇二年、口絵。

- (120) 日浅治枝子「下衣」前掲『日本の労働着』三〇九～三一頁。

- (121) 高橋晶子の先行研究によれば、山梨県のカルサンとモンペは混同されがちで（「カルサンかモンペか」『民具マンスリー』三九巻八号、二〇〇六年十一月）、本稿でとりあげた田中村でも戦後の聞き取りでは「戦時中」は「モンペ」を穿いたという証言が出てくる。

- (122) 「もんぺいで働く旧家の奥さん」『婦人之友』三三卷二号